

学生 ①

「海外研修に参加して学んだこと」

研修先の中国に対する私の認識は、高校生までの社会科の授業や新聞、テレビのニュースでよく出てくる隣国というものでした。今年の1月に研修先が中国に決まってからいつもは聞き流していた中国関連のニュースを見るようになると良い話を聞くことが少なく不安に感じるが多くなってしまいました。しかし、海外の歯科医療の見学は滅多にないチャンスだと思い、少しの不安と大きな期待を胸に北京に向かいました。

成田国際空港に前泊し朝日大学の先生や学生たちと合流しました。朝日大学の学生はみんな明るく話しやすく、直ぐに打ち解けることができました。北京には3時間半ほどで着きました。北京首都国際空港に着いてまず思ったことは、青空が広がって意外にも空気がきれいだと言うことです。これは出発前に中国に行ったことがある友人に「中国の空は白いよ」と言われていた私にとって驚きでした。空港では2人の学生とインストラクターの先生、事務の方の4人が迎えに来てくれました。初日はホテルに到着して一時間くらい休んだあと北京大学口腔医学院の学部長先生主催の晩餐会があり、北京ダックをいただきました。

2日目と3日目は、北京大学口腔医学院を見学しました。口腔医学院は14階建てのビルです。日本でも大学付属病院が14階建てと言うのは珍しくないですが、それは医科の話であり歯科のみで14階建てのビルというのを目にするのは初めてで、その大きさに圧倒されました。大きいのは建物だけではなく患者数も同様で、1日の患者数が平均して4000人ということでした。朝、バスで口腔医学院の門を入るときに建物に沿って座って待っている人たちを見ました。患者がいっぱいで病院内に入れず外で順番待ちをしなくてはならないということにも驚きましたが、初診の患者は前日の夜から並ばないと朝の診療を受けることが出来ないと聞き衝撃を受けました。日本と異なっている点は、ほとんどの科は日本と同じなのですが『口腔粘膜科』という科があることや日本ではprosthodonticsは補綴科ですが、中国語では口腔修復科と言うこと、基本セットがディスプレイブルということや北京大学では学生自身が5年生になると患者さんの治療をしているという点です。先生のチェックを受けながら、それでも学生が自分で責任を持ち治療するというのは日本にはないことで、私とそう変わらない年なのに患者さんの治療ができる知識と技術が身につけていてすごいなと思いました。チェアや使用しているバーは日本のものとあまり変わらないように見え、器具のなか

には日本製の物もありました。

3日目は口腔外科見学や臨床前実習室見学をさせて頂きました。口腔外科見学では先に先生の講義を受けてから手術室を見学しました。手術室は全部で8部屋あり自由に見学することが出来ました。手術室では嚢胞摘出手術や下顎骨切り手術、顎骨骨折の手術を見学しました。大学の講義室で手術法を学び、術中の動画を見ることはありましたが、手術室に入るのは初めてであり、実際に見学することが出来て感動しました。前臨床実習室の見学では、下顎第一大臼歯の全部鑄造冠用の支台歯形成をマネキンを用いて実習しました。このとき使用した歯列模型は日本製で、私たちが実習で使用しているものと同じでした。実習では先生以外にも2人の学生がバーの角度などを丁寧に教えてくれました。

病院見学のあと、私たちは万里の長城、北京オリンピックの会場となった鳥の巣・水立方、天安門広場、故宮博物館、国家博物館、遊園地、頤和園、動物園など北京の有名な観光名所を見学させて頂きました。万里の長城を訪れた日は、生憎の雨で眺望には恵まれませんでした。実際に坂を登り歴史を学ぶことが出来たので良い経験になったと思います。故宮博物館は広大な場所で時間内に全てを見て回るのは少し大変でしたが、明・清朝の美術品や皇帝が実際に使用した調度品を見ることが出来て嬉しかったです。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった北京大学、明海大学の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

学生 ②

「北京大学口腔医学院で得られたこと」

入学時から目標であった海外研修プログラムに参加できたことを心からとても嬉しく思います。私たちは8月10日から17日まで北京大学の口腔医学院を訪問しました。北京大学口腔医学院で過ごした8日間はとても充実し、学生生活の中で一番密度が濃く有意義な時間を過ごすことができました。出発前に昨年の研修のお話を先生や先輩方に教えて頂き、少し心配をしていた事もありましたが、私たちの研修期間は現地の先生が驚くほど天候に恵まれとても良い環境の中過ごすことができました。

北京大学は世界でも有数の大学で、とても立派な大学という事は知っていましたが、私が研

修の中で一番驚いたのは北京大学口腔外科医学院の規模の大きさと教育システムで、その見学は私にとってとても貴重な体験になりました。確かに、渡航前に先輩などから口腔医学院病院の話も伺っていましたが、実際自分の目で見てみるとその規模にとってもびっくりしました。口腔医学院病院の一日の患者数は約 4000 人で良い治療を受けるために中国全土から患者さんが来院するそうです。そのため、病院の外には受診の前夜から治療待ちの患者が列をなしていました。しかも、彼らは翌朝に院外の列から解放されたとしても、院内の受付で再び長蛇の列に並ぶこととなります。しかも、これは受付だけの話ではなく、治療室の外にも多くの順番待ちの患者が溢れかえっていました。このような状況は日本の病院では考えられません。病院入り口には、診療科ごとに先生の顔写真があり先生ごとに治療費が決まっています。治療費は一律ではなく、5~200 円で、役職と専門性を元に決められているようで、この料金表を見て患者本人で先生を指名するシステムなのです。

また、たくさんの診療科を見学させて頂いたのですが、中でも多くの学生が治療する診療室がありとても驚かされました。日本の教育は 6 年制ですが中国では 8 年制で、5 年時から患者さんを実際に治療するということでした。私たちはまだ教科書だけの勉強で病院での実習を行っていないのに対し、北京大学の学生は実際に患者の歯の治療を行っているという事実には圧倒されました。

他の日には天安門広場、故宮博物館、オリンピックが行われた鳥の巣、北京動物園、架空の王朝を題材にした中国雑技を盛り込んだ劇の鑑賞などたくさんの観光ができました。それらの中で、私が一番感銘を受けたのは紫禁城です。何故なら、私は北京での研修へ行く前に、紫禁城が舞台で中国最後の皇帝の話であるラストエンペラーという映画を見ました。ですので、映画の舞台と同じとても広大で立派な場所に立つことができとても嬉しかったです。

研修期間の 8 日の間、とても豪華で美味しいたくさんの種類の中国料理を食べさせて頂きました。今までは中国の料理は全て辛い料理だと思っていましたが、日本料理のように辛くなく、また、見た目が美しい料理も多くあることがわかりました。

8 日間という短い期間ではありましたが、中国の北京大学口腔医学院というとても立派な場所でたくさんの新しい知識を学ぶ事ができました。また、北京大学の学生ともとても仲良く一緒に勉強し、たくさんの中国文化に触れることができ、充実した研修となりました。特に、中国の学生との学力や語学力の大きな差は、私の学ぶ姿勢へのモチベーションを大きく跳ね上げてくれました。この経験を生かし、今後もより多くのことを学び、国際社会で活躍

できる歯科医師なるように頑張っていきたいと思います。このような機会を与えてくださった、大学関係者の皆様にお礼を申し上げます。

学生 ③

「中国で見て感じて学んできたこと」

中国と日本の医療や歯科大学の違いをちゃんと学べるのか、自分の英語で北京大学の学生達と交流ができるのだろうかという期待と不安でいっぱいの中、北京大学口腔医学院に8日間の研修に行ってきました。研修中、北京大学からは毎日一緒に行動して下さる引率の先生1人と日替わりで2人以上の学生が私達の案内をしてくださいました。まず病院見学に連れて行っていただきました。北京大学口腔医学院は14階建ての大きな歯科病院で隣に研究施設を持っており、とても設備が充実していました。病院に入ると沢山の人が診察待ちをしていました。もともと北京大学口腔医学院は中国で最も信頼されている病院の1つなので市外からの受診者も多いことに加えて、研修期間は夏休み中だったこともあり、特に受診希望者が多く1日に数千人という患者がきていたそうです。病院内は引率の先生とホストの学生が案内をしてくださいましたが、各診療科に行くとその科の先生が治療や診療室について詳しく説明して下さいました。たくさんのユニットチェアがある診療室で治療風景を見ていると、1日目に空港で出迎えてくれた学生が教員の指導下で治療を行っていて驚きました。北京大学口腔医学院では5年生から治療を行い7~8年生で自分の選択した科で専門的に治療をするそうです。8年制ということにも驚きましたし、日本の歯科大学では学生が直接、患者の治療を行うということはないので、同じ5年生の学生が先生としてしっかりと責任をもって治療をしていることに、とても感心しました。他には手術室や麻酔科、研究施設、分院などにも行きました。手術室は8室あり、すべての手術室で手術が行われていました。先生方のご厚意で中に入って見学しても良いということでしたのでいくつかの手術を実際に見学しました。上顎骨や下顎骨の劣成長を補う手術や頬骨骨折の手術など授業で教わったことのある内容も沢山ありました。間近で手術を見させて頂き、とても興味深く貴重な体験が出来ました。麻酔科では小児歯科の全身麻酔ができる設備を見ました。小児の全身麻酔に関して北京大学口腔医学院は北京でトップクラスらしく、虫歯の多い子供はよく紹介されてくるそうです。 研究施設

も見学しました。病院の隣にある建物が研究施設で、研究のために広いスペースをとれる北京大学はやはり中国で最先端の医療を行っているだけあるなと思いました。学生も何人かいました。北京大学口腔医学院の学生は7~8年生になると卒業論文を完成させるためにこの施設を使用するそうです。研究棟の1階はマネキン実習室になっていて、支台歯形成の授業を受け実際に実習も行いました。英語での授業でしたが、詳しい説明とビデオで分かりやすく、北京大学の学生も日本と同じように勉強していることが分かって親しみを感じました。講義だけではなく先生から実際に私達の支台歯形成を見てアドバイスももらい、また、学生からもアドバイスを貰いました。他にも病院の様々なところを見学させて頂きました。北京市内には北京大学口腔医学院の分院（門診部）が5つあります。これらは北京大学口腔医学院だけでは患者の数が多すぎて受け入れきれないということで出来た病院だそうです。1つの部屋に2~3台のユニットチェアがあって、ユニットによってはマッサージ付きのものまであるそうです。他には技工室で病院見学以外では、万里の長城や天安門、故宮博物院、国立博物館、オリンピックスタジアムなどの世界遺産を含む史跡、名所にも連れて行って頂きました。中国の広大な土地と人と歴史に圧倒されました。

到着して直ぐは北京大学の学生と、どう会話したらよいかわからず気まずい思いをしました。しかし北京大学の学生は場所の説明など積極的に話しかけてくれ、またこちらの拙い英語にも丁寧に答えてくれました。そのおかげで緊張感も少しずつ薄れてきて、だんだんと会話も多くなり仲良くなっていきました。また、わからない言葉には、より簡単な表現に言い換えてもらいつつ身振り手振りで会話をしました。ただ悔しいことに自分の語彙力が少なかったため会話がスムーズにいかないこともあって、もう少し勉強しておけば会話が出来たのかもと思う部分が多々ありました。様々な事を学び吸収して実りある海外研修となりました。このような機会を与えてくださり、明海大学並びに関係者の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

学生 ④

「北京大学口腔医学院で学んだこと」

本年、北京大学口腔医学院で行われた学生奨学海外研修に参加しましたので、研修内容などをご報告します。

北京の人口は 2018 万（2011 年）であり、上海に次ぐ中国第二の都市、かつ、経済、政治などに高い影響力を有する世界有数のメガシティでもあります。そのような都市にある北京大学はどのような病院なのか、どのような診療をしているのかと心を踊らせながら北京に向かいました。私は中国に行くのが初めてで不安もありましたが、新たな地に踏み入れる高揚感と現地で歯学は勿論、文化的、政治的なこと学ぼうとする意欲に満ち出国しました。

私たちの日程は、10 日に中国に入国し、北京大学口腔医院の学部長主催の晩餐会に招待頂き、11～12 日に北京大学口腔医院ならびに分院の見学、13 日に万里の長城、鳥の巣を視察、14 日に天安門、中国国家博物館を見学、15 日に修了式、16 日に頤和園、動物園、秀水街を視察、17 日に帰国というスケジュールでした。

北京大学口腔医院を見学してみて、日本と 1 番違いを感じたのは、病院の規模と患者の人数でした。北京大学口腔医院には朝から患者が殺到しており、連日長蛇の列を成していました。また、病院も 14 階まであり、各フロアに様々な診療科がありました。チェアに関しては、一般的なチェアからリスクのある患者用に心電図を記録できるチェアなどがありました。また、北京大学にも明海大学と同じく PDI がありました。これは前々理事長の宮田慶三郎先生が北京大学に設立したもので、北京大学と明海大学との友好の証でもあります。北京大学に PDI があるのを見て、明海大学が献身的に歯科発展に貢献しているのが改めて実感でき、この大学に入学して良かったと思いました。

病院見学で特に印象に残っているのは、実際にオペ室に入ることができた口腔外科です。日本では手術を受ける患者は、病室で待ちオペ室まで運ばれますが、中国では手術を受ける患者が多いので、オペ室の前で手術着に着替えて待機していました。オペ室は計 8 つあり、広く、音楽が流れており、術者がリラックスできる環境でした。私は、そのような環境で行われる舌の手術と全身麻酔の導入を見学することができました。舌の手術は舌の中央部を反転させ、その部分を電気メスで焼いていました。全身麻酔は麻酔前投薬の投与から経鼻挿管・導入までの一部始終を見ることが出来ました。麻酔の導入は血圧、心拍数、SpO2などを

チェックしながら行っていました。人が全身麻酔にかかるのを初めて見ることができました。

中国の歯科大学は日本と違い8年教育です。5年生から病院研修を受け、6年生で全ての診療科で研修を受け、7～8年生には自分の選択した診療科で患者を診療し、卒業時には論文を作成するなど、日本とは異なるところが多々ありました。

北京大学に研修に伺った時期には、明海大学における私たちの病院実習はまだ始まっておらず、歯科治療を間近で見たことがない状況でした。しかしながら、北京大学での病院見学で始めて歯科治療とはどういうものなのかを学び、現在の病院研修に活かせることができます。本当に貴重な体験をすることができました。

病院見学の後は北京の観光に行きました。中国の歴史は日本と密接に関係しており、学べることがとても多かったです。特に、万里の長城、天安門、頤和園の三つの世界遺産と北京オリンピックが行われた鳥の巣が印象的でした。

今回、北京大学口腔医院に研修に行き他国の歯科現状を学ぶことができ大変嬉しく思います。海外に行き、その国の歯科事情を学ぶというのは初めての経験で、とても刺激的でした。この海外研修を通して、勉強に対するモチベーションも上がり将来的には世界で活躍できる歯科医師になりたいと改めて思いました。実のある海外研修となりよかったです。このような機会を与えてくださった大学に感謝します。

学生 ⑤

「海外研修で受けたカルチャーショック」

今まで中国の上海、香港、広州には旅行で訪れたが、北京は初めてであった。しかも、北京大学は中国屈指の総合大学で、大学病院には中国全土から患者が集まる歯科医療の最高峰を担っている。さらに、世界で活躍出来る歯科医師の育成にも力を入れている。このような素晴らしい大学に留学出来たことは、私の人生において大きな糧となった。また、この研修を通して知り合った全ての人達との出会いは、かけがえのない宝物である。過ぎてしまえば非常に短い期間ではあったが、時間には比例しない充実した時間を過ごせた。

北京では良い意味でのカルチャーショックをいろいろ体験した。医療システム、歯科教育、

人の多さや建物のスケールの大きさなどだ。やはり最も衝撃的だったのは中国と日本の歯科医療の違いである。病院に入ってすぐのところに全員の医師の顔写真と金額がかかれたボードが目飛び込んでくる。これはその医師の治療にかかる値段を提示しているのだ。つまり、患者が支払える金額によって医師が決まる。日本では皆保険制度により同じ治療をするにしても、ベテランの医師も研修医でもかかる費用は同一だ。ここに中国の貧富の差を垣間見た。この医療における格差社会について、以前、NHK の報道番組で見たことがある。前日から病院前で泊まり込んで順番を待つ貧困層とVIP ルールの特別待遇で治療を受ける富裕層の映像であった。まさに現実はその通りであった。さらに歯科病院のスケールの大きさにも驚いた。人口が多い中国だとはいえ、地上 14 階地下 2 階まである巨大な建物全てが歯科の病院であることに圧倒された。そして、そこには待合室の椅子では座りきれず立って治療を待つ多くの患者の姿があった。毎日 4000 人の患者が来院するとは聞いていたが、各階、溢れんばかりの患者を直接見て、この病院の持つ重要性を改めて身をもって感じた瞬間であった。歯科教育も衝撃的で、日本は歯科医師免許を取得した者のみが治療を行えるが、中国では 5 年生からすでに患者を受け持って治療を行っていた。実際に前日まで行動を共にしていた北京大学の学生が、白衣を着て真剣な顔をして治療にあたる姿を目の当たりにした。また病院見学をさせてもらっていて気付いたのは専門性の多さだ。例えば、口腔外科と同階にあった粘膜科がそうだ。決して広いとは言えない 4 つのパーテーションで区切られた部屋ではあったが、口腔内の軟組織のみを扱う科であり、日本にはないので珍しかった。

ここまで中国の医療現場で見た様々な違いを記したが、やはり同じ医療人として感銘を受けたのが「厚德尚学」という言葉だ。これは分院の入口正面に掲げてある病院のモットーである。意味は優しい気持ちで患者に接するということらしい。医療にまで格差があるとはいえ、国は違えど患者を診る医師の気持ちの根底にはやはりこの言葉があるのだと、医療人を目指すものとしての自覚を再認識させてもらった。また今回の海外研修での目標の一つである北京大学との学生交流も英語で果たすことが出来た。日中関係は今、決して良好とは言えない状況だ。中国に向かう時、一抹の不安がなかったとはいえなかった。だが、そんな不安は全く不要であった。北京大学の先生方、学生のみなさんは私達の温かく歓迎してくださった。そして、共に時間を過ごしていくうちにお互いに自然と笑顔が増えていった。政治的問題を超越した共に歯科医師を目指す者の友情が徐々に育まれていくのを肌で感じた。帰国した今でも北京大学、朝日大学の学生とは交流が続いている。そして、今年は北京大学と明海

大学の大学間の学生交流プログラムのちょうど 20 周年にあたる。その記念となる年に参加出来たことは非常に名誉なことだと自負している。このような貴重な体験は私の人生の中で大きな収穫になった。

最後に素晴らしい機会を与えて下さった明海大学の先生方、学事課の方々、そして私達を引率して下さった安達先生、4人のメンバーにこの場をお借りして心から感謝の意を示したいと思います。ありがとうございました。